

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.194
2019.11.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

加曾利B式土器

— E.S. モースと坪井正五郎のはざまで —

鈴木 正博

● 第30回 ● 「大森式」突起の行方(承前)

「第十一期」は3個の凹みが共通するものの、実際には(イ)／(ロ)／(ハ) (ニ) (ホ)／(ヘ)／(ト)の5種に細別される。(ハ) (ニ) (ホ)は前述の「横壺芝形」突起、その後改め「拳形」突起で、「大森式」からは独立すべき形態的特徴が顕著である。(ハ)の祖形が(イ)となる点は3個の凹みの関係が雄弁である。(ハ)が直立すると(ロ)の形態に近くなることで、(イ)→(ハ)→(ロ)への変化が措定され、「第十一期」という分類はある程度有意の部分がある。その(ロ)の直立形態は(ト)の直立形態と類似しており、共々「第十期」の祖形に相応しく見える。残る(ヘ)は扁平な突起で「第十一期」に留まらず「大森式」突起でも異質であろう。(イ) (ハ) (ニ) (ホ)は「加曾利B1式」。前回除いた「第八期」(ハ)も内文から「加曾利B1式」。(ロ) (ト)は「加曾利B1式」より新しく、「加曾利B1-2式」。(ヘ)も「加曾利B1-2式」であろう。

沼田頼輔による「大森式」突起の慧眼は、「凹み」と「孔」の加算原理に基づく一貫した分類視点により大森貝塚例の全てを「第一期」～「第十二期」に至る「単線順序(モノ・シーケンス)」とする「概括」にあるが、形式制定に至る方法は坪井正五郎の西ヶ原貝塚報告に習う手順(「第一期」の文頭に「坪井教授云々」と明記)を踏むかに見える。

沼田頼輔による突起分類の秀逸性はペトリーの「SD法」と同様、事前の分類で重み付けを行い、明らかに違う性質を「瓶岡式」・「大森式」・「沼部式」・「御所見式」・「都式」という「形式」に区分する手続きにある。しかもそれらの相異の所以を相互に論ずることは措き、「形式」として「概括」する類似性を厳密に細分するのである。新旧を導出する理論が未だ確立しない学史の曙光状況にあり、変化は類似の中しか見出すことが出

来ない、という坪井正五郎の方法は見事に踏襲される。

しかし、この時点での坪井正五郎は既に「異地方発見の類似土器」で「器物形状の一致」に注目し、即ち全形と部分の一体的相関を踏まえた新たな形態学的視点を導出し、「体部の模様」により特定される突起に対してのみ類似度を適応すると共に、「単線順序(モノ・シーケンス)」に留まらず、分岐や並行順序などの「複線順序(パラレル・シーケンス)」も視野に入れており、順序に関する相互検証の重要性と並行系列の可能性を指摘済みである。大森貝塚に限定される突起のみの形態分類と雖も、「器物形状の一致」が無い限り、順序の確定が困難となることは、既に「拳形」突起の型式学により実践されている。

「大森式」突起の意義については、「是等形式に属する把手の分布は南は武蔵の久良岐郡に至り北は常陸の稲敷郡に及び其製作の精麗意匠の巧拙等此相酷似するよりこれを推せば是決して偶然の類似にあらずして此等の地方には直接若しく間接に其交通の行われしや固より論なし」と考察する。今日の眼では「分布の偏在性」に問題があり、大森貝塚においてのみ「第一期」～「第十二期」の「大森式」突起全てを確認するが、加曾利B式を大量に出土する常南総北の椎塚貝塚等では「大森式」突起が稀少傾向という偏在分布を確認するのである。

では、「大森式」突起の偏在分布は何を意味するのであろうか、加曾利B式研究における混乱の極みとなる因縁の系統論的視点は実に明治時代の考古学史に内在しており、やがて貝塚地方から遠く離れた山岳地方における存在が注目を浴びることになる。それが大正13(1924)年12月25日刊行の『諏訪史』(鳥居龍蔵著)という学史的な大冊

であり、「曾つて沼田頼輔氏が武蔵国荏原郡大森発見の把手を模式とし、大森式と命名した把手の形式のものが本郡にも存在する。上図はその例である。」(八幡一郎執筆)として第36図が示される。大正13年の春には山内清男や八幡一郎等が加曾利貝塚を発掘調査し、B地点とE地点の層位と型式の違いを確認しており、第36図の突起形態は大森貝塚との関係で当然の如く山内清男の目にも留まる。山内清男が晩年に加曾利B式の地方差として長野方面に注目する遠因は、『諏訪史』の「大森式」突起に他ならない。

因みに『下伊那の先史及原史時代 図版』(鳥居龍蔵著)も『諏訪史』と同じ刊行年月日であるが、八幡一郎により椎塚貝塚の「拳形」突起の加曾利B1式完形土器が標本として挙げられていることにも注意するならば、自ずと「拳形」突起を「大森式」突起から独立させる気運が窺える。



(二) 手把器土 減手薄 圖三百第
▲第36図 『諏訪史』の「大森式」突起

*巻頭連載は隔月です。次回は太村裕さんです。

目次

■加曾利B式土器 「大森式」突起の行方(承前)(第30回) 鈴木正博 …1
■考古学の履歴書 ことのはじまり(第23回) 間壁忠彦・間壁霞子 …2

■リレーエッセイ マイ・フェイバレット・サイト(第187回) 四田寛人 …3
■考古学者の書棚 『縄文の思想』 岡本一秀 …4

考古学の履歴書

ことのはじまりー「..それでは 何だ」(第23回) ————— 間壁 忠彦・間壁 霞子

5. 富比賣の出現(天平宝字七年銘の墓地買地券文)(6)

先回は、この墓地買地券が出土した当時の、所蔵者であった、医師の佐藤家当主左仲が天保10(1839)年頃記した『家略記』が明らかにされたことで、そこに記された博は3枚出土とあったことが問題となった。しかも近い所に、宝龜7(776)年銘で矢田部首人足とも記した博があり、それを所蔵した家は、橋本家ということで話が終了。

この橋本家と佐藤家の関係は極めて緊密なことが、『家略記』で判明した。この記録を書いた佐藤左仲の娘、精が橋本家に嫁いでいたのである。左仲の長男は夭折し、次男も、左仲の死後、若くて死去。橋本家に嫁いでいた精の息子護一を、養子に迎えたのである。ところがこの護一の息子も夭折した。そこで護一は娘の婿として、自分の弟の子を養子に迎えたのである。これが橋本武市で、明治時代のはじめごろ、『好事雑報』に売地券のことを書いて、3点あったが1点は備中松山藩主に献上した、と書いた人物だったのである。しかし彼の書いていた買地券に関する内容は『備中誌』と全く同じであった。佐藤家を継いだ彼にしても、特に調べたことではないと思われた。こうした婚姻関係は、佐藤家の墓地からも確認できたのである。

ただ左仲は、3面は同文であった、とも書いていた。実は、出土時にはあまり気にしてなく、本体が全体に読めてなく、しかも2面は最初から壊れていたと見てよい。恐らくは、年号が書いてあったというくらいと「天田部」があったというくらいの印象だけではなからうか。彼は「矢田部」でなく「天田部」だったと思ひ込んでいたようである。3枚はその点では似ている。

いずれにしても確証は何もないが、買地券の周辺で、似た資料として注目されるのは、この資料だけである。両家の関係があまりにも近いので、可能性を考えたまでである。この資料も、中央の学者からは全く注目されてなかったが、岡山県下では知られた資料だった。現在は、岡山県立博物館に寄託されていると聞く。

改めて、やっと存在の認められた富比賣とは、一体何者であったかとなると、彼女は、「比売」をつけて記されていた。これは尊称ともいえることは前に述べた。しかし彼女はいずれにしても全くの庶民であり、戸籍で矢田部石安の家族であっても、妻とも母とも分からず、子供なら同姓の筈だが、姓が白髮毗登(おびと首)であり、本来は他家の人間である。

もしこの地域に多少でも買地券などを作る風習が伝わっていたら、少なくとも、たとえ1~2点でも類似品が欲しい物である。それがなかったことが、今までも偽物視される一端であったといえる。せっかく見つかった類似品は太宰府のほうだった。しかも内容は大きく違う。

ここで全く唐突な話となるが、富比賣の死は天平宝字7(763)年、この翌年、吉備真備が太宰府で70歳も満ちたので、と退職を願い出ている。だが中央政府からは、造東大寺長官を命ぜられたのだ。真備はそれまで10年もの間、大宰府の高官ではあったが、中央からは遠避けられていた。

これも以前大宰府の宮ノ本買地券を述べた際、名前のことで、大宰府で買地券を作った人物の名前は、真備の子供の名前にあやかったのではなからうか、というようなことも書いた。もし両者

が、中国の文化や風習に詳しい、吉備真備という人物を媒介としてつながる物であれば、富比賣のこともその線上で一つの創作話も出来上がる。

吉備真備の祖母骨蔵器と、富比賣買地券出土地点は、4kmばかり離れているに過ぎない。真備の母の墓誌は奈良県の五条市出土とされる。だがこれは既に本体が失われている。妻については一切語られない。40才ばかりで唐から帰国した彼は、注目された立場にいたが、妻のことは一切分からない。ただ娘とされる由利は、真備が九州にいた時も、宮廷近くにいた可能性もあり、息子の泉も都で、近衛府に従五位下で任官していたようである。ただ真備帰国後の子供のため、由利が長女とすると、泉はせいぜい25歳程度ではなからうか。

枚雄は無位であった。真備が退職を願いながらも、中央で藤原仲麻呂(恵美押勝)の乱で功労があったとされ、位や役職の上がる中で、枚雄は従五位下に任じられている。これは枚雄が父とともに九州にいた可能性があり、都に帰った時は20才は超えていても、九州に赴く時はまだ少年の可能性もある。彼が都で生まれた頃には、当然乳母がいてもよい。泉・枚雄が続けて生まれておれば、当時の真備などの家では乳母的な人物がいても良く、その後も長く、面倒をみた女性がいてもよいであろう。真備の面倒をも見る人物となっていたかもしれない。彼女は生活経験も豊富で、備中の矢田部氏に選ばれて、真備の家に来た優れた女性だったのではなからうか。

九州での真備や枚雄には彼女は、無くてはならぬ大切な家族となっていたのであろう。真備から見れば、まだまだ若いその彼女が、急な病で死んだ。この時真備も70歳になる身を思い、退職を思い、彼女を故郷に帰すことを思ったのではなからうか。火葬した彼女を、枚雄に託し、故郷を離れて長い者の墓所として、中国での買地券になぞられた葬法をと望めばよいとの添書と共に、充分な経費も添えての願を、故郷におくったのではなからうか。

故郷の人々も郷長も、少々緊張した中での富比賣の葬儀が行われ、その後は枚雄とともに、故郷の各地の人々との交流は幾日続いたのであろうか。富比賣に対処こうした虚像も描けるだろう。

次回からは富比賣買地券偽作説の、心ならずも原因となった、真備祖母の骨蔵器について語りたい。

間壁忠彦 略歴

1932~2017年	岡山県児島郡甲浦村(現岡山市南区)郡に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部法学科卒業
1954~1973年	(財)倉敷考古館学芸員
1973~2006年	同上館長
1968~1998年	広島大学、1968~1980岡山大学非常勤講師(博物館学)、他に熊本・九州・愛媛・鳥取・千葉大学へ博物館学非常勤講師出講
1982~2005年	就実女子大学非常勤講師(考古学)、ほかに島根大学へ考古学非常勤講師出講
2006~2015年	(財)倉敷考古館学術顧問

間壁霞子 略歴

1932年	岡山市門田屋敷(現岡山市中区)に生まれる
1951年	岡山県立操山高等学校卒業
1955年	岡山大学法文学部史学科(日本史専攻)卒業
1955年	岡山大学法文学部副手(池田家文書整理)
1956~2015年	(財)倉敷考古館学芸員
1979~1986年	中国短期大学非常勤講師(歴史学)
1985~2004年	神戸女子大学非常勤講師1年を経て助教授(1991年まで)教授(2004年まで)、以後同大学名誉教授
1995年	明治大学で論文博士(歴史学)

隔月連載です。次回は井川史子先生です。

Jレーエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 187

鳶尾塚古墳 ～岡山県総社市

四田 寛人

今回私が紹介する^{とびおづか}鳶尾塚古墳は、岡山県総社市下林に所在する、横穴式石室を内部主体とする古墳です。この古墳は総社平野の中ほどにある三須丘陵のなかに存在し、近辺には岡山市造山古墳や総社市作山古墳、同こうもり塚古墳、江崎古墳などが存在しています。また後の時代には備中国分寺や国分尼寺が建立されるなど、まさに古代吉備の中心といえる地域に鳶尾塚古墳は所在しています。

鳶尾塚古墳は西川宏による『吉備の国』（1975年、学生社）などで紹介されるなど、地域の研究者の間では周知の古墳でした。一方で近年まで古墳の地形測量や横穴式石室の実測などのまとまった調査が行われていなかったこと、調査を担当した清家章教授（岡山大学大学院社会文化科学研究科）によって、四国を中心とした瀬戸内海周辺に点在する角塚型、およびそれに類する横穴式石室と関係する可能性があるという指摘を受けて、2017年度に岡山大学考古学研究室が墳丘測量調査および横穴式石室の実測を行いました。

墳丘は測量調査の結果、径約23m、高さ3.6m以上を測る円墳であり、2段築盛をもつ可能性が考えられます。横穴式石室は全長約12.5m、玄室長7.5m、奥壁幅2.2mを示し、ほぼ東方向に開口します。鳶尾塚古墳の横穴式石室の特徴として、横穴式石室に巨大な石材がふんだんに用いられていることがまず挙げられます。まず目を引くのは長さ5.0m×幅2.2m以上を測る天井石(図1)です。この巨石は岡山県南部全体を見渡しても最大級の長さといえます。また奥壁や側壁にも2～3m以上の石が複数用いられています。

横穴式石室の特徴をみると、まず玄室奥壁は最大幅約2.2m、高さ約2.3mの石材1石のみで、玄室側壁はともに2～3段積みで構築されます。天井石は玄室長7.5mに対して2石のみで架構され、奥壁側の石材が非常に巨大です。玄門部は

両袖式ですが、袖部の位置が左右ですれていること、そして楣石が羨道天井石に対して一段低く架構されることが特徴として指摘できます。奥壁が1石のみで構成されることや楣石については、周辺の総社市緑山古墳群や同こうもり塚古墳、江崎古墳などを代表とする吉備の横穴式石室と共通する特徴といえます。

岡山県南部周辺の横穴式石室をみると、型式学的な変化の方向性として、玄室と羨道に用いられる石材の大型化と段数の減少、玄室と羨道の不明瞭化といった点が指摘されます(新納1987、2009など)。鳶尾塚古墳と周囲の古墳を比較してみると、2～3段積みの壁面構成や玄門部前壁の断面形などの特徴、玄室と羨道の幅の差が小さくなっていること、一部石材の表面が非常に平滑であり石材に加工が施されたと考えられることなどから、TK43型式の須恵器が知られるこうもり塚古墳・江崎古墳やTK209型式に位置づけられる広島県福山市二子塚古墳に後続する6世紀末～7世紀初頭の時期が考えられます。7世紀に位置づけられる古墳の調査事例は吉備地域ではあまり多くなく、調査されたものでも中小古墳がほとんどであることから、この時期の有力な古墳の様相を知ることができる古墳の一つであると思われる。

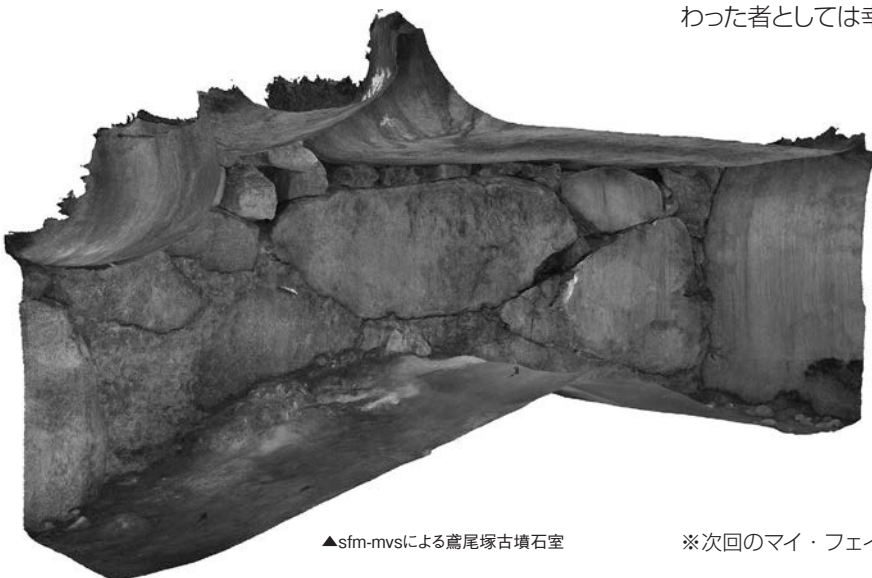
ここまで、2017年度の測量調査の概要を述べてきました。その後、2019年度からは岡山大学考古学研究室などによって発掘調査が実施されています。この発掘調査はヨーロッパの団体などを行う国際調査となっており、様々な面からの検討が予定されているということです。上述したように、鳶尾塚古墳はこれまで明確な首長墳が知られておらず、「空白の期間」であった7世紀の吉備地域を考えるうえで大変重要な位置を占めるとともに、古墳時代の終焉を理解していくなかでも欠かすことのできない古墳であると思われる。そのような鳶尾塚古墳の今後にご期待いただければ、わずかながら調査に関わった者としては幸いです。

報告書:

清家章・四田寛人2019「鳶尾塚古墳I
一墳丘測量調査・石室実測調査報告一」
岡山大学考古学研究室

参考文献:

新納 泉1987「緑山古墳群の築造年代と
形成過程」『緑山古墳群』
総社市文化振興財団
新納 泉2009「前方後円墳廃絶期の暦年代」
『考古学研究』56-3



▲sfm-mvslによる鳶尾塚古墳石室

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは三輪紘士さんです。

考 古学者の書棚

「縄文の思想」

瀬川拓郎著／講談社現代新書(2017)

岡本 一秀

職場の博物館ボランティア養成講座で考古学入門の講義をするため、縄文時代、弥生時代についてあらためて勉強しなおす機会を得ました。関西出身ということもあり、これまで縄文時代はあまりなじみがありませんでしたが、就職して初めての発掘現場で縄文時代の石匙が出土したことは、全く無縁であったわけではなかったのでしょう。

昨年あたりから縄文ブームになり、東京国立博物館では「縄文-1万年の美の鼓動」が開催され話題になりました。また、職場の今年の春の特別展も「縄文土器とその世界-兵庫の1万年」で、兵庫県をはじめ、各地の縄文土器をまじかに見る機会を得ました。また、最近、甲州から信州、新潟方面へと旅行する機会があり、立ち寄った各地の博物館で見た縄文土器の造形に、関西とは異なる文化が存在することを強く感じさせられました。火焰型土器の複雑な造形は、当時は意味があるものであったはずですが、現代の我々には理解することができません。この断絶は何であるのかと疑問に思っていました。

そうした中で出会ったのが、瀬川拓郎氏の著書「縄文の思想」です。著者は、北海道札幌市の出身で、岡山大学で考古学を専攻され、現在は旭川市立博物館館長をされています。アイヌ文化についても研究されており、近著では「アイヌ学入門」を上梓されています。

学生時代に民俗学を学んでいた私は、本の帯にある「アイヌ・海民・南島…縄文は生きている!!!」という言葉にとっても興味を引き付けられました。本書の構成は以下とおりです。

はじめに

序章 縄文はなぜ生き残ったのか

第1章 海民と縄文-弥生文化の中の縄文

第2章 海民とアイヌ-日本列島の縄文ネットワーク

第3章 神話と伝文-残存する縄文の世界観

第4章 縄文の思文-農耕民化・商品経済・国家の中の縄文
おわりに

はじめにで、著者は縄文の思想は、海辺や北海道、南島など周縁の人々の弥生時代以降の歴史から浮かびあがらせるとしています。

アイヌと「古事記」「日本書紀」「風土記」の古代海民の神話・伝説には、共通するモチーフ、他界への往還伝説であると指摘します。さらに南方の島にも、修験道にも世界観・他界観の共通性を見だします。

第1章では、残存する縄文の習俗として、最近まで海民に残っていたとされる抜歯の習俗、イレズミ、九州西海岸に残るアイヌ語地名、貝の道と石棺墓の分布、出雲方言と東北北部方言の共通性など具体例を挙げて双方の類似性を指摘しています。

第2章では、生態系から見た北海道の特徴は、陸海獣や魚類が豊富な北の生態系と熱帯に起源をもつ水稻耕作という南の

生態系が重なり合った「あわい」の世界であるとして、このことが本州の人々との濃密な関係を保ってきた理由としています。北海道における弥生～古墳時代の海民とアイヌの祖先集団との交流として、鹿角製刀剣装具の分布、北海道の洞窟壁画と九州の装飾古墳の壁画との類似性を指摘しています。

第3章では、アイヌの神話・伝説と「古事記」、「日本書紀」、「風土記」との共通するモチーフを指摘しています。古代の「肥前国風土記」と「出雲国風土記」に海の神であるワニが、川をのぼって山の女神のもとへ往還するという海民伝説がありますが、アイヌにも海の神が高山に向かうという同じモチーフがあることを指摘しています。この高山は、地下にある死霊の世界の出口を意味していて、その入り口は海辺などの洞窟としています。このことは南島、修験者の世界観・他界観との共通性があることも指摘しています。さらにはアイヌ神話とアメノヒホコの日光感精と卵生のモチーフの共通性にも触れ、それらは縄文の世界観が周辺民だけでなく、農耕民の中にも根ざしているとしています。

第4章では、縄文の世界観・他界観を共有していた周縁の人々に注目し、かれらの共通する生き方の中に縄文の思想を読み解いています。非農耕の生業に従事した南九州の隼人や古代大和国の山中で狩猟漁撈・採集を生業とした国栖を王権が取り込み、王権を守護する呪術的な力を期待していました。また芸能により王権を言祝いでいたが、その芸能も海と山を往還する神による祝福という縄文の世界観に根ざしていると指摘しています。また、家船漁民の贈与への執着、分配を通じた平等、強制や圧力の拒否、他者や土地とのゆるやかなつながり、中心性を排除した合意形成、外部に対する強い暴力性など例を挙げて縄文の思想を読み取っています。

おわりにでは、徳島県南部の海辺にある村の自殺率が低いこと。その理由として、江戸時代に成立した「朋輩組」と呼ばれる相互扶助組織の存在をあげています。この組織は、他人と足並みをそろえることに重きを置かず、水平な人間関係、弾力性の高い合意形成のプロセスの中で、個人の自由意志が最大限尊重されるもので、いつでも入退会自由、入会を拒否しても排除されずに何ら不利益を被ることもなく、男女が平等に参加できる仕組みである。町の人々は統制されることを嫌い、緩やかにつながっており、人に強制すれば「野暮」といわれる。こうした「生き心地の良い町」が新潟県の粟島、東京都の利島、東京都の神津島、愛媛県の魚島、広島県の下蒲刈島、長崎県の伊王島、鹿児島県の上甕島、沖縄県の渡嘉敷島など全国の島嶼部に分布しているという。そこには、我々が遠い昔に忘れ去ってしまった、海民の思想が現代にも息づいているのだとしています。

神話・伝説の調査という民俗学的手法と、遺物の分布論を用いることで鮮やかに縄文時代の思想を浮かび上がらせることができる。本書は、そんな刺激に満ちた内容の著書です。

《 訃 報 》

アルカ通信にたくさん連載していただきました神村透先生が9月に他界されました。
心よりの感謝とご冥福をお祈りいたします。先生、本当にありがとうございました。

合掌

アルカ通信 No.194

発行日 2019年11月1日
企画 角張淳一(故人)
発行 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801 長野県小諸市甲49-15 TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp URL : http://www.aruka.co.jp